

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

無料

第 43 号

特集
1964年から未来へ



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 | 第43号を発刊するにあたり

■特集■

1964年から未来へ

- | | | |
|----|--|----------------------|
| 4 | 映画は何を残すのか | 玉木 正之 |
| 13 | '64年アーカイブ①真っ赤なブレザー | |
| 14 | 遺産は東京五輪映画
—— 師岡 文男 | 波多野 圭吾 ^{構成} |
| 22 | 「ふたつのオリンピック」から日本人を見る
—— ロバート・ホワイティング × 玉木正之 | 阿部 雄輔 ^{構成} |
| 28 | '64年アーカイブ②野菜サラダ | |
| 29 | '64年アーカイブ③エチケツト | |
| 30 | 3分で人生が変わった
—— 坂井 義則 | 長田 渚左 ^{取材} |
| 41 | 古代オリンピックの理想は今も「聖火」に宿る
—— 笠原 一也 | 阿部 雄輔 ^{構成} |
| 47 | 夢劇場『馬』No.16「羽のある馬」 | 長田 渚左 |
| 48 | バックナンバーのご案内 | |

【表紙イラスト】 南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第43号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



最近、1964年の東京五輪を見た人に会うと、妙に話がはずむ。55年前の平和の祭典が、それぞれ特別な記憶で刻まっているからだろう。

私自身は都内の小学校3年生だった。マラソン観戦のために、全校の生徒が早朝から甲州街道の沿道に座らされた。

長い長い待ち時間を、私たちは少女フレンドやマーガレットといった漫画雑誌を回し読みしながら待った。すべて読み終わり、それでも何も起こらず、また同じ雑誌を読んで退屈な時間を過ごした……すると、やがてどこからか「来るぞっつ」「来たぞっつ」と、野太い声が伝令のように響いてきた。

私が漫画から目を上げた途端、右から左へ黒い影のようなものが通り過ぎた。「エッ!」というだけ

の時間。あまりの速さと褐色の肌……何が何だか分からず、あつけに取られた。

それが世界最高記録で五輪2連覇を達成したエチオピアのアベベ・ビキラ選手だと知ったのは、夜のテレビのニュースだった。アベベが私の前を走り抜けたあの一瞬は、何だかとてもないものを目撃してしまったという実感があり、世の中は知らないことに満ちあふれているのかもしれないという深い井戸をのぞいたような気分だった。何だか凄かった。帰り道は誰とも言葉を交わさず、いつもの曲がり角で別れる友達たちに手を振ることも忘れていた。いつの頃からか、あの時がスポーツ界の人を伝える仕事の原点だったと思うようになった。

来年の東京五輪もきつと人々に、特別な記憶を刻み込むに違いない。今、あらためて1964年の東京五輪を思い返しながらか、2020年への扉を開きたい。そんな思いを込めて、特集を組みました。

どうぞお楽しみ下さい。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW

Hakuju
白寿生科学研究所



株式会社 御福 餅本家

人と社会を支える力



国土館大学

文藝春秋

Aji Eat Well, Live Well.
AJINOMOTO



ヤマト運輸

上月財団

立ちどまらない保険。

BS11
日本BS放送

MS&AD

三井住友海上

日本体育大学

公益財団法人
住友生命健康財団

JAPAN SPORT
COUNCIL



都市に豊かさと調いを

三井不動産

株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構



東江テクニカ



笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

KOSÉ

(順不同)

///1964年から→未来へ///

映画は何を残すのか

玉木 正之



未来永劫語り継がれるに違いない史上最高の「スポーツ記録映画」——市川崑監督映画『東京オリンピック』製作費 3 億7000万円、103台のカメラと232本のレンズ、500人余のスタッフで撮影された40万フィート（70時間分）のフィルム。そうして「創られた」映画を再検証する

玉木 正之（たまき・まさゆき）スポーツ・文化評論家。1952年、京都府出身。東京大学教養学部在学中より東京新聞紙上で執筆活動を開始。日本で最初のスポーツライターを名乗る。著書に「スポーツとは何か」（講談社現代新書）など多数。訳書にR・ホワイティング「ふたつのオリンピック」（KADOKAWA）、「和をもって日本となす」（角川文庫）など。

私が市川崑さんに初めてお会いしたのは一九九一年十二月。当時、ベルリン・オリンピック（一九三六年）の記録映画『オリンピア』（民族の祭典・美の祭典）を撮ったドイツの女流映画監督レニ・リーフェンシュタールさんが、日本で自伝を上梓されたのを機に来日。旧知の二人の対談で司会を務めてほしいと招かれたので、大喜びで某出版社に足を運んだ。

映画『東京オリンピック』の製作にあたって、崑さんはレニさんの名作を大いに参考にし、また手本にもしたという。レニさんは戦前、女優やダンサーとして活躍したあと映画監督に転身。ナチスの宣伝映画『意志の勝利』を製作したことで、戦後戦犯として裁かれたりもした。当時89歳で写真家として高く評価された彼女は、新たにスキューバダイビングのライセンスを取得し、地中海の海底撮影に挑んでいた「スーパーパーお婆さん」だった。

そんなレニさんが、崑さんに向かって『オリンピ

ア』撮影時のエピソードを次々と披露。棒高跳びの撮影は試合が終わってから競技場に新たに大量の照明装置を設置して撮り直す予定が、アメリカと日本のメダリストが祝賀会に赴き呼び戻すのに大変だった……とか、マラソン優勝の孫基禎選手（当時日本の占領下にあった朝鮮半島の選手で日の丸を胸に優勝）には、練習時に首からカメラをぶら下げてもらって走る足元を映したり、ランニング姿を併走するクルマから延ばした竹竿の先のカメラで頭上から捉えたり……、さらに陸上競技の選手の姿を、空を背景に下方から捉えるため、カメラを設置した穴に選手が落ちて、五輪関係者と喧嘩になったこと……など、レニさんは老いてなお素晴らしい美女とか言いような美しい笑顔を輝かせながら語り続けた。

私は、頭の隅つこに「ヤラセ」という言葉を思い浮かべながら、「崑さんいろいろなやられたのではないですか？」と訊いてみた。

すると、こんな答えが返ってきた。

「レニさんほどには別撮りはしてないな。試合会場以外で別に撮影した競技は体操のチャスラフスカ選手演技だけ。彼女の姿があまりにも美しかったので、きちんとした照明で撮り直した。あとはマラソンで銅メダルになった円谷選手。国立競技場に10台以上のカメラを配置したのに、誰も彼の表彰台でのアップを撮れなかったので、後日彼の宿舎のあった自衛隊の朝霞駐屯地で、胸にメダルを掛けてもらってアップを撮った。それくらいかな」

それに、富士山も……と私は口を挟んだ。70mmシネマスコープの銀幕の左右いっぱい雪をいたいだいた巨大な富士山が雄々しく映り、その前を聖火ランナーが走る。しかし聖火が富士山周辺を走ったのは9月上旬。まだ雪はなかったはずだった。すると崑さんは、笑いながらこう言った。「だって富士山に雪がなきゃオカシイだろ」

思わず私も噴き出しながら、さらに質問を続けた。

映画を創ったんだよ、映画を

体操の床競技で選手の靴が床と擦れるすりキュッキュッという音や、鉄棒の大車輪でブーンブーンという音が入ってるのは「ウソ」ですよ。私は思わず口にしてしまった「ウソ」という言葉に、自分でもたじろいでしまったが、崑さんは何事もなかったかのように平然と答えた。「当たり前じゃないか。SE (sound effect) 効果音」もBGM (back ground music) 背景音楽」も映画にはなくちゃならないものでしょ。僕は映画を創ったんだよ。映画に記録映画も芸術映画も、ドキュメンタリーもドラマもありやしない。僕は映画を創ったんだよ。映画を」

このときの崑さんの言葉は、あきらかに『東京オリンピック』完成時に日本中を巻き込んだの大論争となった「記録か／芸術か」という問題の延長線上にあるものだった。

記録性のない失敗作

問題の発端は、東京五輪翌年に完成した映画『東京オリンピック』の試写を見た、その当時の国務大臣で五輪担当の河野一郎氏の次のような発言だった。「あれは芸術かもしれないがオリンピック外伝だ。後世への記録映画なのだから芸術性のために記録が犠牲になっては困る。(略)初めから終わりまでいいとこなし」(『サンデー毎日』1965年3月28日号
以下同)

この河野発言をきっかけに賛否両論が渦巻くことになったのだが、「記録性がない」という多数の声に加え、山口瞳、五味康祐を初め、当時の高名な作家諸氏が、次々と「映画としても失敗作」と舌鋒鋭く非難した。

「オリンピックは本来勝利者の歌で綴るべきもの。それを市川君は負け犬の精神で作っている」(武智鉄二氏)

「市川君のスポーツに対する不感症と感傷主義を露呈しているのには失望した」(舟橋聖一氏)

「あんなものが芸術だといわれては片腹痛い。彼は楽屋裏と道具方ばかり見せた。観客は客席から見たかったんだ」(五味康祐氏)

「これは悪しき素人主義であり、過った人間の描き方である。(略)砲丸投げの玉が地面に当たればドスンと音がする。ハンマー投げの球が軟弱なグラウンドに落ちれば、地中にのめり込む。そんなことをどうしてあんなに面白がるのか。ハードルで負けた依田(註…郁子。80mハードルでメダルを期待されながら5位に終わった女子選手)は、レース前にコースを箒で掃き、口笛を吹き、ゴリラのように歩くところを撮られている。この人たち(註…映画撮影スタッフ)は依田が吉岡(註…隆徳。かつて「暁の超特急」と呼ばれた世界的短距離走者で依田選手のコーチ)と過ごした長い苦しい歳月を理解しようとしていないのだ。依田の口笛が「人生劇場」(註…当時

流行した演歌）であることを発見したのが、そんなに嬉しいのか。バレエの藤本（註：佑子。女子バレーボール代表選手の名メダリスト）はちょこまかと動き回って（註：汗の落ちた）床を（註：モップで）拭く。この人たちは彼女の絶妙なレシーブを理解できないのだ」（山口瞳『新入生諸君！』角川文庫Ⅱ 1973年3月刊より）

長々と「市川崑批判」を引用したのには理由^{わけ}がある。というのは公開当時中学一年生だった私は、映画『東京オリンピック』を見て大感激したのだが、その感激の大部分が山口瞳氏の大批判の部分だった。

日常と世紀の祭典

依田選手の口笛も、藤本選手のコミカルな動きも、オリンピックの決勝という大舞台での出来事であることを思うと、スポーツというものは何と人間のありのままの姿を引き出すものであるかということに驚嘆しないわけにはいかなかった。そのような驚き

や仕掛けを、崑さんは随所に散りばめたのだ。

開会式の入場行進が行われている国立競技場の片隅で、突然身を寄せて語らい合う外国人カップルの姿が挿入されたりもしている。あるいはトイレの前で赤ん坊を背負った母親が、もう一人の子供の世話をしている姿が映し出されている。世紀の祭典とはいえ、それ以上に「重要な日常」もあることを崑さんは描きたかったに違いない。

そもそも記録を重視せずに、選手という人間のアップの「姿」を中心に描いたのは、スポーツ（の勝者）を「絶対化」するのではなく、スポーツそのものを「相対化」する試みと言っていいだろう。スポーツを、あるいはオリンピックを、無前提的に素晴らしいものと捉えるのではなく、スポーツという営みに挑戦したひとびとから滲み出てくる「人間ならではのエクス」のようなもの、それを映像に拾い集めたもの——それが映画『東京オリンピック』と言えるのではないだろうか。

「スポーツに蘊蓄^{うんちく}のある人にはもの足りなかったかもしれない。だけど写されているのはスポーツそのものなんですよ。スポーツ・ファンだけの映画じゃないということですよ」（市川崑・森遊机『市川崑の映画たち』ワイズ出版Ⅱ1999年9月刊より）

崑さんは、ふだんは主にニュース映画を撮っている大勢のカメラマンに対して、「アップを撮れ！アップがほしい！頭と顎が切れるくらいの顔のアップがほしい」と繰り返し命じたという。

まわせ、まわせ、カメラまわせ！

カメラマンへの指示として作成した絵コンテにも選手の顔や身体のアップが数多く描かれ、開会式のシーンでは客席で靴を脱いで長椅子に立つて背伸びする女性の足元のアップや、警備で職務中の警察官の開会式の行進を覗き込む後ろ姿まで描かれ、それがそのまま映像となっているのだ（昭和30年代、日本人は競技場の椅子に登って立つときは靴を脱いだ

のですね）。

また100m決勝でスタートラインについた選手が、神経質に小刻みに唇を動かす顔の様子も絵コンテに描かれており、そのまま映像となっている。これなどは、予選や準決勝で気づいた選手の様子を、崑さんが絵コンテに取り入れてカメラマンに指示したのだろう。

もちろんスポーツの場では思いも寄らぬ期待をはるかに凌駕するハプニングもあった。女子バレーボールの決勝で日本の優勝が決まった瞬間、コート内で大喜びして抱き合い跳びはねて喜び合う選手たちとはまったく無縁に、大松博文監督だけはひとり杳然と立ち竦^{すく}み、力なく腰をベンチに落とした。その瞬間、現場にいた崑さんはカメラマンに駆け寄り、「まわせ、まわせ！カメラまわせ！彼を撮れ！」と押し殺した声で叫んだという。

そして柔道無差別級では、日本の神永昭夫選手がオランダのヘーシンク選手に押さえ込まれた瞬間、

「お家芸敗れる！ 日本中が涙！」などと騒がれた場面に続いて、敗れた神永選手が美しい笑顔で勝ったヘーシंक選手を讃えて握手する姿が映し出されているのだ。

あのときの神永さんの笑顔、素晴らしいですね、と言うと、崑さんはニコリと笑って「カメラマンの力だよ」と言われたのを今も憶えている。

成功させたハプニング

さらに見事な閉会式。当初は国別に選手が整然と行進する予定だったのが、国旗だけの行進に続いて各国の選手たちが入り乱れてどつと競技場に雪崩れ込んできた。このときも崑さんは、国立競技場の客席を走り回って何人ものカメラマンに、「まわせ！まわせ！」と叫んでまわり「カメラマンの力のおかげで素晴らしい映像になった」という（映画とは無関係だが、この機会にこの閉会式の「ハプニング」について記しておきたい。崑さんだけでなく、今も

この閉会式が突発的に起きたハプニングだと思っている人が多いが、じつは当時の組織委員会事務局次長だった松沢一鶴氏が仕掛けたものだった。戦前の水泳日本五輪代表の監督でアジア大会などで式典部長を務めた彼は、東京五輪の開会式を見て戦前同じ場所で見えた出陣学徒壮行会（学徒動員）の行進を思い出し、閉会式は軍隊式でない行進にするよう、大会期間中に関係者を説得してまわった。そして本番では選手入場口で日本酒を振る舞ったりしてこの「ハプニング」を成功させたという。

公開当時は様々な批判に曝された映画『東京オリンピック』だったが、その評価は年を重ねるごとに高まり、今では世界的にも「史上最高のスポーツ映画」とも評価されている（私がインタヴューした映画『メジャーリーグ』の監督で、『ステイキング』でアカデミー脚本賞を受賞したデヴィッド・S・ウォード氏もそう断言していた）。

と同時に、1964（昭和39）年当時の東京の汚

れた街（当時の東京は「汚穢都市」^{おわい}とも呼ばれていた）の姿や、公害（大気汚染）の様子、そしてそこから始まった新しい建設の槌音まで、映画『東京オリンピック』は、そのすべてを見事に捉えた「記録映画」とも言える。

オリンピックとは何？

そんな映画の出発点となったのが映画『東京オリンピック』のシナリオで、これは当時の組織委員会から、どんな映画になるのか概要を知りたいので……と提出を要請されたものだった。崑さんも当初は、ドキュメンタリー映画にシナリオが必要なのか？ また、可能なのか？ と訝^{いぶか}ったが、和田夏十（脚本家・市川崑夫人）、白坂依志夫（脚本家）、谷川俊太郎（詩人）の各氏の協力を得て脚本を作成した結果、「自分のスポーツやオリンピックに対する考え方を深める意味で、非常に役立った」という。

そのシナリオには次のような一文がある。

「この映画は純然たる記録であつて、しかも単なる記録に止めてはならない」「現在の我々に欠けているものは、つくりものを尊ぶ気風である」「尊いのはほんもので、つくつたものはまやかしたという信仰をこつぱみじんに碎かねばならない」「我々はこの映画を創作する」のであり「この映画を観る人には、人間のすばらしさとかなしさを！」

この「戦闘的」とも言える「映画づくり」のマニフェストに基づいて映画『東京オリンピック』はつくられたのだ――。

*

駒沢競技場でサッカーの撮影に同行していた折、崑さんは思いがけない情景と遭遇した。和服姿の年配の女性が十人あまり、日の丸の描かれたチケツトを手^てに崑さんの傍に近寄り、こう言つたのだ。

「すいません。お尋ねしますが、オリンピックは何^ど処^こでやっていますでしょうか？」

日本中がオリンピックに沸き立ち、婆さん方も

(おそらく) もらったチケットでオリンピックに来
てみたところが、目の前では男たちがボールを蹴り
合っているだけ……。

崑さんは、この一件以来「オリンピックとはいっ
たい何なのか？」と考え続け、シナリオにはなかつ
た最後の一文で映画『東京オリンピック』のエンデ
イングにしたという。

「人類は4年ごとに夢を見る。この創られた平和を
夢で終わらせていいのであろうか」

私は、このエンディングだけが少々不満だった。
批判するほどのことではないが、映画のなかでスポ
ーツの素晴らしさ、美しさ、楽しさ、そして悲しさ
……が見事に描かれ、オリンピックのすべて、東京
の街や時代のすべてまで描かれ切ったのに、この一
文だけは何かとつてつけたような感じが否めなかつ
たのだ。長年そう感じていたところへ、同じような
思いに囚われていた人物の見事な発言と出逢った。

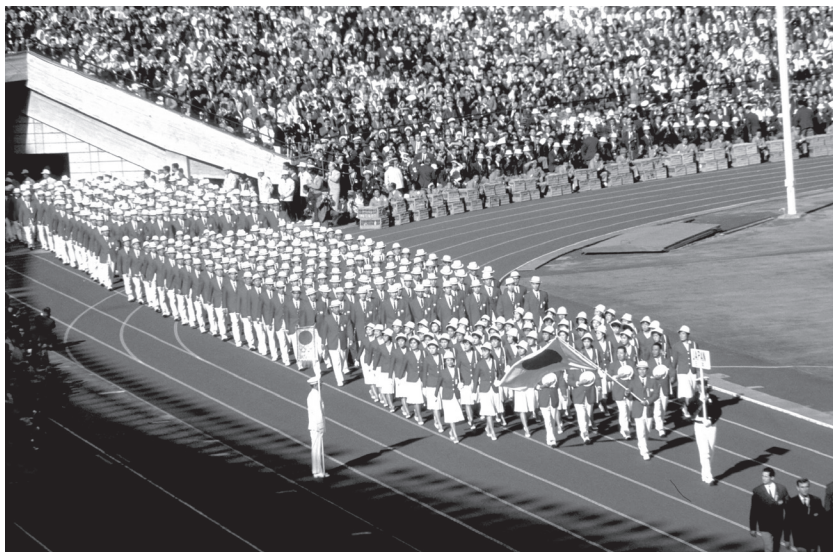
「(あの一文は) オリンピックをどう位置付けたら

いいかわかんなくて、棚上げにした結果だと思っ
てですよ」

こう言ったのは、最近他界した作家の橋本治氏。
彼は『東京オリンピック』を絶賛したあと、こう結
んでいる。

「今、市川崑がああ映画を作ったら、『オリンピッ
クは人類最大の嘘である』くらいのことを言うと思
う。そうなつてこそ、市川崑の『東京オリンピック』
になるんじゃないかと……。でも(略) やっぱりな
んかを信じたと思うから、あんなつちやうのか
な」(和田誠・森遊机『光と嘘、真実と影 市川崑監
督作品を語る』河出書房新社 2001年8月刊
り)

市川崑さんの名作『東京オリンピック』は、長く
未来までも多くのひとびとに繰り返し見直され、語
り直されるに違いない。そして2020年のあとに
は、どんな新たな作品が現れるのだろうか？



一糸乱れない行進が郷愁をさそう

©PHOTO KISHIMOTO

東京五輪のブレザー姿に納得

開会式、各国選手団の入場で94番目のしんがりに登場した日本選手団に人々の目は釘付けになりました。真っ赤なブレザーに白いスラックス、白いスカート。その鮮やかさに驚き、上下別々の色を着用することも有りか!? と、学んだのです。それまでは上下とも同じ色、おもにどぶネズミ色のスーツ姿が日本人には一般的でした。東京五輪の各国選手団のブレザーの着こなしも参考にしてカジュアルな上着を着る習慣となっていました。ブレザーは服飾業界で売り上げを急激に伸ばしたと言われています。加えてスニーカーもこの頃から日本人は履くようになった。それまで国内で運動靴やズック靴は子供や学生が運動をするときに履くものだと思われてました。ところが五輪で海外から来る欧米人の多くが運動靴を履いてました。日本人はそのカッコ良さにも驚いて、マネしようと思ったのです。

///1964年から→未来へ///

遺産は東京五輪映画

師岡 文男 構成 波多野圭吾

1964年東京オリンピックの開会式からわずか3日後。

世界で最も早く公開されたオリンピックの記録映画がある。

製作したのは8ミリカメラを手にしたアマチュアカメラマングループ「東京エイト」。

彼らが記録したオリンピックは、日本にどんな影響を与えたのか——。



(本稿は2019年4月20日、株式会社白寿生科学研究所にて行われた日本スポーツ学会主催「第117回スポーツを語り合う会」の講演をもとに構成しました。)

師岡 文男(もろおか・ふみお) 1954年東京都出身。上智大学名誉教授、スポーツ庁参与。ラグビーワールドカップ2019組織委員会顧問。東京2020機運醸成意見交換会委員。ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会委員・参与。JOC総務委員。日本ワールドゲームズ協会執行理事。GAISF国際スポーツ団体連合元理事。IWGA国際ワールドゲームズ協会元理事、日本フライングディスク協会会長。

アジア初のオリンピックが東京にやってきた1964年まで、一般の日本人は自由にパスポートを取得することができませんでした。外交や国費留学など、限られた人しか海外に出られなかったのも、ほとんどの人は外国に行ったことがありませんでした。東京でもアメリカ人をちらほらと見かけるくらいで、アフリカなど他の地域の人を見ることはまずありませんでした。東京オリンピックの開幕時に94の国と地域の関係者が一斉に来日しましたが、多くの人はそこで初めて外国人を見ることになったのです。

当時、学研から出ていた雑誌の付録がオリンピックに参加する国の名前と国旗のシールだったんですけど、私も買って開会式までに必死に覚えめました。当時は小学5年生でしたが、シールと照合しながら食い入るように開会式の中継を見たことをよく覚えています。

その10年後、上智大学の3年生の時にはアメリカをホームステイしながら1周するツアーに参加しま

したが、今思うと小学5年生の時のオリンピックの経験が海外に興味を持つことの第一歩だったと思います。毎日が英語のシャワーで本当に辛かったです。何とか習うより慣れろの精神で2ヶ月を乗り切りました（笑）。

映画は目に見える原色

私の父親はプロのスチールカメラマンで、昭和10（1935）年くらいから銀座を中心に東京全域、日本全国の風景を撮っていました。その後、小型映画の出現と共に50年代の前半からは8ミリ映画も撮っていました。オリンピックが開催された64年は、8ミリフィルムのカートリッジが普及し始めて、手軽にカラー映像が記録できるようになった頃でもあります。父は17人のアマチュアカメラマンと一緒に「東京エイト」というグループを組織し、製作資金として今のお金で一人が20万円くらいずつ支出してオリンピックの記録映画を8ミリで制作しました。

開会式からわずか3日後、10月13日に、キャノンが銀座ヤマハホールで開催していた8ミリ映画作品の映写会で上映し、新聞に大きく取り上げられるほど大きな話題になりました。

父が記録映画を作ったのには2つの理由がありました。ひとつは、オリンピックという国民共通の感動体験を、目に見えるままの原色で記録することです。当時はまだ白黒テレビが主流で、テレビ画面からはオリンピックがどのような色の空間で行われているのかがわかりませんでした。カラーは天然色と呼ばれていましたが、8ミリなら目に映る色をそのまま記録することができました。

市川崑監督の記録映画もカラーで制作されましたが、1年後の公開でしたし、映画用のカメラ機材は大きいので、ほとんどの競技がスタンドから撮影されました。でも、8ミリはカメラ本体がコンパクトなので、色々なところに持ち運んで撮影することができました。64年大会の開会式では選手団の入場行

進はよく知られていますが、実は選手たちが競技場に入っていく前から行進している様子も公開されており、父の映画は5mほどの至近距離からの映像を提供しています。一般市民の目線から、手を伸ばせば届くような距離にいる各国選手たちの仕草や息づかいも含めてフィルムに記録していったのです。

視覚からの衝撃

もうひとつの目的は、8ミリカメラが大きな可能性を秘めた機材であることを、世に知ってもらうことでした。今でいうと、スマートフォンのように手軽に撮影ができたわけです。父は、止まった画である写真では表現しきれないものが映画にはあることを自覚していて、映像が持つ力の大きさをよく私に話してくれました。

目の前に広がる光景を映像で、しかもカラーで記録できて、編集の仕方を覚えれば誰でも映画が作れる。8ミリなら即時性に富んでいて臨機応変に撮影

できることを、父は多くの人に知ってもらいたかったのです。当時すでに8ミリカメラを所有している人はいましたが、子どもが生まれた時など家族行事を撮ることがほとんどでした。そうした映像は家族以外に見たいと思う人はそれほどいませんよね。でも、国民の最大の関心事であるオリンピックなら、きっと多くの人が見たいと思うはず——。父にとつて、オリンピックを記録することは8ミリカメラの可能性を示すベストな場だったのです。

当時、フィルムは現像所に持ち込んで1週間ほどしないと視聴可能な状態になりませんでした。父は即時性を非常に大切にしていたので、東洋現像所(現・IMAGICA Lab.)にわずか1日で現像するよう無理を聞いてもらいました。現像所から戻ってきたフィルムを徹夜で編集し、次の日には自前で雇ったフリーアナウンサーにナレーションを頼んで仕上げ、慌ただしく上映までこぎ着けました。

上映会は大盛況でした。当時の日本人は地味な色

の服を着ていましたから、街の風景を撮影していても、ほとんど色彩を感じることはありませんでした。でも、オリンピックには原色のブレザーやユニフォームを着た選手たちがたくさん出てきて、肌の色や体型までもくつきりと色鮮やかな姿を映し出し、会場に詰めかけた観客を驚かせたのです。「東京でとんでもないことが起きている!」という感覚が、まず視覚から入ってきたんですね。白黒のテレビ放送ではなく、カラー映画だったからこそその衝撃です。一般市民にはそうしたリアルなものを見たいという潜在的な欲求があつたのだと思いますし、父にはそれに応えたいという気持ちがあつたのだと思います。

電光掲示に世界が驚いた

1964年の東京オリンピックは、当時の日本人の共通の思い出です。敗戦からわずか19年。オリンピックに向けて何かせずにはいられない、国際社会への復帰を目指して、めまぐるしい勢いで変わって

いく日本の姿を目の当たりにした気がします。あの大会がなければ、日本は今と全く違う国になっていたと思います。

その最たる例がテクノロジードでした。例えば、日本IBM社が計時や採点、競技結果計算の自動化を実現した「オンラインシステム」は、私たちが今使っているICカードやクレジットカードの決済、給与振込などの元となったシステムです。このシステムを整備するのに、日本IBM社は3人の社員を担当させていましたが、それではとても手が回らず、最終的に260人以上の社員が関わったと言われています。競技の結果が瞬く間に電光掲示板に表示されるのには、世界中が驚きました。

また、それまで、オリンピックの公式記録は大会が終了してから1ヶ月程かけてまとめられることがほとんどでした。でも64年の東京大会は、オンラインシステムのおかげで閉会式の終了とともに大会に参加したIOC委員に手渡すことができました。日

本の画期的な技術が、オリンピックと日常生活のIT化を実現させたと言っても過言ではないでしょう。新幹線や首都高速道路などの交通インフラがこの時期に整備されたのは有名な話です。ユニークなところでは、64年の大会に合わせて建設されたホテルニューオータニが、外国人の利用者に富士山を見てもらおうと、最上階に戦艦大和の砲塔技術を応用した回転式のレストランを作りました。フロア全体が70分かけてゆっくりと1周するのですが、全く揺れることなく落ち着いて食事と眺望を楽しめます。

ちなみに、ホテルニューオータニは当時の日本で一番高いビルでした。地震がきても倒壊しないように、耐震設計が考えられるようになったのはホテルニューオータニがきっかけです。ですから、オリンピックが私たちの生活と無関係だなんてことはなくて、オリンピックを機に開発された技術や考え方は、今もなお生き続けているんです。

2020年の大会では、どんな技術が出てくるの

でしょうか。注目のひとつは、翻訳機の「ポケットク」でしょうね。今までの翻訳機は精度が今ひとつで実用に耐えませんでした。が、ポケットクは使えば使うほどAIが学習して翻訳の精度が高まっています。日本のテクノロジが、今後の世界を変える勢いを生んでいくことも十分に考えられるでしょう。

宇宙船地球号に乗っている意識を！

2020年に向けては、我々一般の市民が大会に参加する206の国と地域の名前を覚えることが、何よりのおもてなしになると思っています。また、国名を覚えるだけでなく、街中に国旗を掲げること、海外に自国の国旗があるということは、自分たちの国の存在を認めて欲しいという承認欲求を満たすことになるんです。

206の国と地域というのは、国連の加盟国数を上回る数字です。それだけの国と地域が、オリンピックを機に一堂に会するんです。そして、その様子

がテレビやインターネットで全世界に中継される。私たち人類は、「宇宙船地球号」に乗る運命共同体です。これからの地球は、気候変動、水不足や食糧不足などの色々な問題を抱えていきます。こうした問題を皆で解決しようと思ったら、まずはこの地球にどんな国があつて、どんな暮らしをしているかを知る必要があります。オリンピックがただの競技会ではないと言われているのは、そうしたことをスポーツを通して知ることができるからなんです。

昨年、日本の総人口が約47万人減りました。長崎市や富山市の人口と同じくらいの人数です。今後は、毎年そのくらいの規模で人口減が続いていくんです。内閣が外国人労働者の確保に躍起になっているのは、このままでは日本の労働者が減っていき、経済規模がどんどん縮小していくからです。日本が外国人労働者を受け入れずにはやっていけないことは、火を見るよりも明らかで、オーストラリアのような多民族国家にならざるを得ない状況にあるんです。お互

いの文化やアイデンティティを大事にしつつ、色々な国の人たちと仲良くしながらこの国を守っていかなければならないんです。

第三の開国

そういうタイミングで20年の大会が東京に来ることはすごく意味があつて、オリンピック・パラリンピックを通じて色々な国のことを調べたり、実際にふれ合ったりする機会を作ることが重要です。どんなに小さな地方都市だって、オリンピック・パラリンピックに出場する国や地域と交流するチャンスがあるんです。わざわざ大会ボランティアに登録して10日間働かなくても、おらが町の自治体に働きかけて「ホストタウン」に登録してもらい、出場選手数が少ない国の選手団を大会前に自分の町に呼んであげれば、日本全国でオリンピック・パラリンピックを味わう雰囲気になっていくでしょう。それこそがオリンピック・パラリンピックの真髄です。

IOCはオリンピック憲章の中で「スポーツ・フー・オール」の重要性を説いています。オリンピックの競技大会はあくまでオリンピックの象徴で、大会の開催が目的ではありません。オリンピックを通じてスポーツへの関心を集め、オリンピックの下で性別や人種、宗教など全ての差別をなくしていく。世界中の人々が安心してスポーツをできる環境を整えるとともに、互いを認め合う共生社会や平和な世界を実現することが、IOCの本当の目的なんです。

でも、一般的にはオリンピックまで到達できない人の方が多くて、オリンピック憲章すら読んだことがないという人もたくさんいるのです。普段スポーツに関心の無い人でも、オリンピックの時だけは生で観戦したいとか、何か協力したいとなります。そういう時こそ、世界の共生のあり方を考える良いチャンスなんです。

そうした意味でも、2020年は日本にとつての「第三の開国」の年になると思います。一度目は鎖

国を解いた江戸時代末期。二度目は1964年の東京オリンピックで、多くの一般市民が世界に色々な国があることを知り、実際にそうした国々に触れることになりました。そして今度の2020年。これからの時代に求められるのはグローバルな人材です。現代の日本は安全で便利な国ですが、ここに閉じこもっていると、世界が見えなくなってしまう。20年の大会が世界に目を向けるチャンスになって欲しいと思っています。

2016年大会の開催地決定投票に負けた時、パフレットを床に投げ捨て、舌打ちをしながら会場を後にする議員の姿が外国メディアによって報じられました。互いを尊重し合うオリンピックに反する行動で、二度と繰り返してはならないことです。私はそのことを2013年9月「2020年オリンピック・パラリンピックの開催地決定を待つ会」での講演で述べました。その影響か、その後に行なわれた、20年大会の招致決定を祝す東京都副知事の乾杯

の発声では、敗れたイスタンブールとマドリッドに敬意を表す様子が見られました。小さなことかもしれませんが、そうした振る舞いがオリンピックで最も大事にされるべきことなのです。

最近 は自国の利益を第一に考える指導者が増えていて、また大きな戦争が始まって不思議ではありません。そんな時代だからこそ、世界で唯一の被爆国である日本が平和をアピールしていかなければならないんです。オリンピックの閉会式は、8月9日、長崎に原爆が落とされた日に開催されます。平和の大切さを発信する絶好の機会になるはずです。

大会の開幕まで、あと1年。これから、いかにオリンピック・パラリンピックの意義を一般市民の方たちに伝えていけるか。スポーツに関心がない人たちにも、今日のような出前講座をやったり映画を見せたりして、オリンピック・パラリンピックとスポーツが持つ価値を広めていくのが今の私に課された役割だと思っています。

///1964年から→未来へ///

「ふたつのオリンピック」 から日本人を見る

ロバート・ホワイティング × 玉木正之 構成 阿部雄輔

1962年に初来日。2年後のオリンピックに向けて激しく変貌する町に魅せられて以来東京に住み続ける作家ロバート・ホワイティングさんが自伝的ノンフィクション作品『ふたつのオリンピック 東京1964／2020』を上梓した。「ふたつのオリンピック」は東京を、日本をどう変えてきたのか——。同書を訳出した畏友玉木正之さんと語り合う。



ふたつのオリンピック



ロバート・ホワイティング（るぼーと・ほわいていんぐ）1942（昭17）年10月24日、米国ニュージャージー州生まれ。45年にカリフォルニア州に移り住む。ハンボルト州立大学在学中に合衆国空軍に入隊。61年に東京都府中市の第五空軍極東司令部に派遣され、電子諜報活動に従事する。65年の除隊後は上智大学で政治学を専攻。卒業論文は「自由民主党の派閥について」。出版社勤務などを経て執筆活動を開始し、77年の処女作『菊とバット』（鈴木武樹訳）が日米でベストセラーに。主著に『和をもって日本となす』（90年。玉木正之訳）、『さらばサムライ野球』（93年。松井みどり訳）、『東京アンダーワールド』（2000年。松井訳）など。漫画『REGGIE』（ヒラマツミノル画）の原作者でもある。

玉木 ロバート・ホワイティングさんが「TWO OLYMPICS」という本を書き、私が翻訳させていただいて、『ふたつのオリンピック 東京1964／2020』（KADOKAWA）というタイトルで出版しました。ホワイティングさんは長年の友人なので「ボブさん」と呼ばせてもらいますが、初めて日本に来られたのが1962年で、2年後のオリンピックに向けて東京がものすごい勢いで変わっていく時でした。ボブさんご自身が日本に行きたいと望んだわけではなくて、アメリカ空軍の軍人としての任地が日本でした。ボブさんは軍のスパイだったという噂がありますが。

ロバート・ホワイティング（RW以下同） 諜報部の一員でCIAの指揮下にはあつたけれど、スパイじゃないですね。分析官、アナリストですね。

玉木 何を分析していたんですか？

RW 日本や台湾の基地から飛び立った偵察機がソ連、中国、北朝鮮の上空を飛んで収集した核兵器施

設やレーダー施設のデータです。国境を侵犯して敵地に入るわけですからいつ撃墜されるか分からない。僕らはパイロットが命懸けで持ち帰ってきた録音テープや写真フィルムを府中の「電子諜報センター」というところで分析していました。

玉木 日本での軍務は1965年3月に終わるんですが、除隊しても帰国しないので、カリフォルニアのお父さんからは「ジャップ・ラヴァー（JAP LOVER）」と非難されたそうですね。

RW 私の父は第2次世界大戦中ガダルカナル島で戦いましたから、日本に残りたいという僕の気持ちは到底理解されませんでしたね。

玉木 結局ご家族の反対を押し切って日本に残り、今に至るまで東京にお住まいです。『ふたつのオリンピック』はボブさんの自伝的ノンフィクションであると同時に1964年東京オリンピック前夜から2020年東京オリンピック前夜まで、ボブさんが見聞、体験した東京の変貌の歴史が綴られています。

故郷から離れるために軍隊に志願

玉木 本書からキーワードをいくつかピックアップしてみます。まず「ユーレカ」。ボブさんのホームタウンです。カリフォルニア州北部、サンフランシスコのさらに北で、近くにジョン・スタインベックが生まれ、『エデンの東』の舞台になったサリナスという町がある。「ユーレカ」の語源はギリシャ語です。アルキメデスが風呂に入っている時に金の比重を発見して、「エウレカ」と叫びながら真つ裸でシラクサの町の中を走り回ったという。

RW 「見つかった」という意味ですね。何が見つかったかと言うと「金」ですね。19世紀に金が発見されてアメリカ中から人が押し寄せた。ゴールドラッシュです。カリフォルニアですけど北の方なので雨ばかり、あんまり暖かい日はない。住んでいるのは白人ばかりで、人口3万人のうち黒人は一人だけ、アジア人は一人もいないような町でした。

玉木 とにかくユーレカの町から出て行きたかったんですね。高校を卒業して地元の州立大学に進学しますが、軍隊に入ればお金がなくても家を出られる。そのために大学を横に出て軍隊に入られた。1962年1月、19歳で来日されて、その年にキューバ危機が勃発します。「冷戦・核危機・JFK」というキーワードを挙げました。ソ連がキューバの基地に核ミサイルを持ち込んで、アメリカ合衆国全土が核攻撃の脅威にさらされます。当時のアメリカ大統領はJ・F・ケネディで、キューバを海上封鎖して対抗する。全面核戦争に突入する可能性もありました。その最中に20歳になられた。

RW そう、最悪の誕生日になる可能性もありましたね。戦争になったら僕らが働いている府中の基地は間違いなくソ連のミサイルの標的になりますから

玉木 核ミサイルの恐怖も感じながら緊張感のある毎日で、それでも基地の周りには飲み屋があつて、当時トルコ風呂と言っていたソープランドがあつて、

米兵を相手に商売をしている人もいた。新宿や渋谷、六本木にもけっこう遊びに行っていたようですね。

RW 基地で安く買ったジョニーウォーカーの黒ラベルを持って行ったら、どこでも親切にしてもらえましたね（笑）。

玉木 ボブさんは渋谷の「ハッピーバレー」というダンスホールのバーテンダーと友達になります。「ヤクザ・沖縄・在日コリアン・GAIJIN」というキーワードを挙げましたが、彼は当時渋谷を仕切っていた暴力団安藤組の組員で在日コリアンでしたね。

RW 除隊して上智大学を卒業して、サラリーマンだった頃の話ですけど、東中野駅前の「ボキド」というスナックで知り合って友達になった住吉会の組員は沖縄出身で、沖縄人もアメリカ人も日本ではアウトサイダーだ。だから友達になりました。そういうこともありました。

玉木 軍隊生活の一方、ボブさんは英会話学校の先生になります。大勢の外国人が東京オリンピックに

来日するということで、英語の勉強が大流行しました。

RW 10歳の子供が英会話の先生ということもありました。僕は神保町のドミニコ会の学校で教えていましたが、1時間1000円もらえました。レッスンと言ってもただ会話をするだけ。How are you? What's your name? How old are you? とどうような会話を1時間ぐらいしたら1000円。当時日本人の初任給が1万円ぐらいでしたね、月給で。

開会式の日、東京は生まれ変わっていた

玉木 1965年3月に軍務を終えた後も日本に残り、上智大学に通われます。なぜ日本に残る決断をされたんですか？

RW 当時の東京はエネルギーにあふれていて毎日がエキサイティングでした。町がものすごい勢いで変わっていった。たとえば1959年にオリンピック招致が決まった時、東京の水洗トイレは¼ぐらい、水道水は汚くて飲めない、赤ちゃんの死亡率も高い

不衛生な町でした。

玉木 当時東京は「汚穢都市」^{おわいとし}と呼ばれていた。水洗・下水が完備してなかったの、排泄物をバキュームカーで吸い取って郊外に運んで田畑の肥料にしていたという。こんな汚い町でオリンピックができるのかと言われたのですが。

RW それから5年間で水洗化が進み、ホテルニューオータニやホテルオークラなど高級ホテルができ、地下鉄が2本、高速道路が8本、羽田空港と都心を結ぶモノレールができました。東京と大阪を結ぶ新幹線も完成。オリンピックの開会式の日には東京はハイテクな町に生まれ変わっていた。

「巨人勝ちましたか？」で会話が始まった

玉木 次のキーワードは「野球」です。

RW 日本に来た時は日本語が全然分からなかったんですけど、野球の放送だけは半分ぐらい分かったんです。ストライク、ボール、ホームラン。あの時

代、バーに入って「巨人勝ちましたか？」と聞いたから会話が始まった。野球の話で日本人の友人ができました。「巨人の星」のテレビもよく見ましたよ。あのお父さん、今なら犯罪でしょう（笑）。でもあの時代には良い教育だと思われていた。お父さんがいなかったら飛雄馬は大スターになれなかった。イチローも同じですね。

玉木 そしてライターとしてデビューする時にジャパニーズベースボールをテーマに選ばれた。デビュー作『菊とバット』はベストセラーになって、私も大変面白く読みました。それでインタビュをさせてもらったのがボブさんとの出会いです。1983年。赤坂のリキ・アパートにお邪魔しましたね。大家さんは力道山の未亡人です。もうひとつかがいたのが学生時代、渡邊恒雄さん。読売新聞のあの「ナベツネ」の家庭教師をされていたんですよ？

RW 担当教授だったオリ・カン先生が渡邊恒雄の友人で、渡邊は一年後にワシントンDCの支局に行

くことになっていて、英語の家庭教師を求めています。あの時彼は40歳ぐらいで勉強の虫。フランスの政治の本とかドイツの哲学の本が書齋に並んでいましたよ。それからずっと友達だったんですが、1988年に東京ドームができて、巨人は毎試合観衆5万6000と発表していましたが、おかしいと思って調べたら、東京ドームの地下3階で「収容人数4万6314人」いう東京消防庁のサインが貼つてあるのを発見して、「週刊朝日」に記事を書いたんです。渡邊はほんとの観衆の数を明かしたことでなくて、「週刊朝日」に書いたことに激怒して、東京ドームを出入り禁止になりました。

2020年の懸念は暑さだけ？

玉木 出入り禁止、初めてじゃないですよ。クライド・ライトやレジー・スミスのインタビューで何度も出入り禁止になっていますよね。私もよくいろいろな球団から出入り禁止になりましたが（苦笑）、

お互いジャーナリストとしてやらなければならないことをやってきたという、何か戦友のような気持ちがあります。最後に2020年の東京オリンピックについて期待することを教えてください。

RW 1964年の東京オリンピックは真に歴史的なイベントで、2020年はどんな良いイベントをやってもあれを超えられないと思います。世界に新しい東京を紹介できると思います。僕は今豊洲に住んでいます。レインボーブリッジから見る夜景はほんとに美しい。問題は暑さだけ。1964年の時は東京の夏は暑過ぎるから10月10日から始めたいというJOCの希望が通りましたが、その時から平均気温はさらに3度ぐらい上がっているのに。

玉木 秋にやれないのはアメリカのテレビ局のせいでしょう？ もっとも猪瀬直樹都知事時代の招致委員会がIOCに出したペーパーには、真夏の東京は選手が最大限の力を発揮するスポーツに最適の氣候と書いてありましたけどね。

オリンピック記念切手、スポーツ切手がもれなくついています！



世界スポーツ切手セール

締め切りはもう目の前！10月24日

もう何枚たまりましたか？ 風味豊かな、栄養タップリの日清サラダ油。お買い上げごとにもらえるオリンピック記念切手、スポーツ切手。この機会を見逃さず、集めましょう！

海を越えた味と香り……

耳にのこるファンファレの響き……

開会式の感激もあらたなトウキョウの朝

お台所のサラダづくりから

楽しい食卓の思い出がスタートします

主役はもちろん日清サラダ油！

山と盛られたさわやかな風味

「ドレ・ビアン」ニッポンのサラダはステキ

本場のお料理通にも認められた味と香り……

日清サラダ油がとりもつ国際親善

……彼女は民泊にやってきましたバリっ子でした





日清サラダ油

日清製油株式会社

〒100（丸の内）東京本町1-15-11 402室 13 品川工場

‘64年五輪開催中の新聞広告は、「ニッポンのサラダはステキ」とPRした

資料提供：日清オイリオグループ

野菜サラダは東京五輪から……

今や食生活に欠かせない生野菜のサラダは、東京五輪の頃から日本人に広まったことをご存知ですか？

それまで日本人は、野菜を生で食べることに抵抗感が強かったのです。理由は野菜の栽培には、当時は肥料として人糞尿を使用していて、寄生虫病が国民の間に多かったからです。小学生のときに検便をすると、クラスに何人かは陽性でした。だから日本人は「野菜は火を通して食べなくちゃ……」と信じていました。

ところが欧米人がレタスやキャベツを生で食べる習慣があると知り、日本の農業は化学肥料と農薬で「清浄野菜」なるものを次々と栽培していき、生野菜サラダはオシャレで健康的な定番メニューとして誰もが食べるようになりました。



エチケツトを覚えた

東京五輪に向かって日本人はマナーをうるさく言うようになりました。当時はマナーと言うよりエチケツトという言葉でした。〃外で立ち小便するな！ランニングシャツやステテコは下着だから、家の外に出てはダメ！〃学校でも職場でも〃エチケツト〃が合言葉みたいになっていました。

外国人のお客様に失礼があつては大変だという心配りでした。それまで外で男は、かなり平気で立ちションをしてましたけど、この頃から気をつけるようになっていきました。今はほとんどいなくなつたどころか、男も腰かけ便器にすわって用を足す時代でしょう（笑い）。

当時はあちこちに写真のような注意書きが建つてました。

///1964年から→未来へ///

3分で人生が変わった ～無名の聖火ランナー～

坂井 義則 （聞き手 長田渚左）

1964年10月10日、第18回オリンピック東京大会開会式のクライマックス。

19歳の坂井義則は、トーチを聖火台にかざした。

世界中の聖火ランナーが走り継ぎ、10万713人目の彼が大役を果たした……。



——東京五輪を知る世代にとって、最終聖火ランナーの坂井義則さんの名前は忘れ難いです。当時はまったく無名の青年だったわけですよ。

坂井 無名も無名。人生は本当に何が起きるか分からないですよ。

——出身地の広島では中学、高校と陸上をやっていたんですよ。三次高3年の時には、山口国体の男子400メートルで48秒5のタイムで優勝しています。

坂井 ずっと陸上部で、東京五輪を目指していました。広島の田舎ですからコーチもいなくて、「陸上競技マガジン」を読みながら、ひたすら練習に明け暮れていました。上京して早大の競走部に入部してからも、ずっと東京五輪出場を夢みていました。日本陸連の強化指定選手にも選ばれていました。ところが、1964年7月の五輪最終選考会は準決勝で敗退してしまい、失意のどん底にたたき落とされました。もう何も手につきませんでした。広島の実家

に帰るのもいやで、同じように目標を失った仲間と一緒に神戸の六甲山のふもとでボートとしていました。一週間くらい実家に連絡しなかったね。

——行方不明だったのですか？

坂井 はい。仕方なく実家に戻ったら、「おまえどこに行ってたんだ」と親にしかられてね（笑い）。そんなとき、札幌で強化合宿中だった早大の先輩の小掛照二さん（三段跳び元世界記録保持者）から、はがきが届いたんです。そこに「聖火ランナーの候補に名前が挙がっているから自重しろ」と書かれていたんです。

——驚きましたか？

坂井 いやあ、聖火ランナーといわれても何のことか分からないし、「何だそれ」って、気にもとめないで、相変わらずゴロゴロしていました。でも、そのうちに妙に周囲がザワザワしてくるのです。共同通信の記者が急に来たりして。「何だろう」と思っていたら、8月に入った頃だったかなあ、朝日新聞

の記者が「坂井くん、東京に行こう」って言ってきた。こっちは五輪の目標を失っていたし、時間も持てあましていたから、遊びにでも連れて行ってくれるのかなあ？　なんて考えていて……。

初めての飛行機

——東京五輪開幕の2カ月前ですよね。日本全体の高揚感や期待感を感じていましたか？

坂井 五輪が近づいてきたという感じは濃厚でしたね。五輪の話題が日増しに新聞に溢れていくようでした。『もう戦争国家じゃない、平和国家に生まれ変わったんだ、世界に追いつくんだ、そのためにも平和の祭典を成功させよう』というムードに日本中が包まれていました。

——朝日新聞の記者は坂井さんをどこへ連れて行ったのですか。

坂井 あれはほとんど拉致だった。忘れもしない8月10日の朝早く、朝日の記者と一緒に広島駅から列

車に乗りました。すると列車が駅に止まるたびに「坂井義則さん、坂井義則さん、駅から至急自宅に連絡してください」というアナウンスが流れてくる。でも横にいた朝日の記者は「かまわない。無視しろ」と言うんです。したら明石駅で他社の記者とカメラマンが列車に乗り込んできた。それを察知した朝日の記者が今度は「急いで降りよう」と言い出した。その後、大阪まで車で移動して、伊丹空港から深夜に朝日のセスナ機で東京へ飛びました。飛行機に乗るのは初めてでした。僕が小さな飛行機に目を白黒していると、パイロットが「大丈夫だよ。アメリカのケネディ大統領も同型に乗っていたから安心だよ」と言っただけ。

——スパイ映画みたいですね。何も知らされていなかったのですか？

坂井 その道中に「聖火ランナーの最終走者に内定した」と報道されたことを知らされました。

——なぜそんな激しいスクープ合戦に当人が巻き込

まれたのでしょうか。

坂井 今では考えられないでしょうが、当時は新聞の報道協定なんてない時代だったから、各社が火花を散らしてスクープ合戦を繰り広げていました。最終聖火ランナーの情報も激しく飛びかっけていて、高校球児の名前も挙がったりしていました。そんな最中、朝日新聞が「内定」と報じたので、他社はさらにムキになって僕を捜していたことを、後になって知りました。

——結果として朝日新聞は見事にスクープを的中させました。ところでいったい誰が坂井さんを選んだのですか？

坂井 個人名は知らされていないんです。聖火ランナーのメンバーは明日を担う若者として16〜20歳で編成されました。ただ、僕の誕生日は広島に原爆が投下された昭和20年8月6日で、僕は爆心地から70キロのところで生まれています。それから19年たって、平和の祭典が東京で開催される。敗戦からの復

興と平和国家を世界にアピールするひとつの象徴として、自分の経歴が分かりやすかったことは間違いないでしょうね。新聞の見出しにもなりやすかったんでしょうね。

——平和のシンボルとして坂井さんは聖火ランナーに打ってつけたのだと思います。最終聖火ランナーはプロボクシング世界ヘビー級王者のモハメド・アリやフィギュアスケート五輪メダリストの伊藤みどりさんら、ビッグネームが務めるのが恒例です。無名の青年は大抜擢でした。誰かが強硬に押しとしか思えません。

坂井 まったく分かりません。だからここからは僕の推測です。当時、朝日新聞の運動部長は早大陸上部出身の織田（幹雄）さんでした。1928年のアムステルダム五輪陸上三段跳びの金メダリストです。その織田さんあたりが、東京五輪組織委員会の事務総長だった田畑（政治）さんあたりに提案して決めたのではないかと思っています。織田さんも広島出

身でしたから。

——なるほど。そういえば田畑さんの出身は静岡ですが、元朝日新聞の記者でしたね。だからすんなり決まったのかもしれませんが、平和の祭典として意志のある素晴らしい人選でした。

坂井 拉致されたまま上京して、お茶の水の山の上ホテル（ヒルトップ）に3日間缶詰になるんですが、その間、朝日の記者に国立競技場に連れて行かれて「ちよつとトラックを走ってみるか」と言われ、何枚か写真を撮ったんです。僕もついその気になって応じてしまいました。

——内定スクープに続いて、完成したばかりの国立競技場での試走写真も朝日新聞で報道されたわけですね。状況的に考えて織田さんの演出と考えるのが妥当でしょう。

坂井 織田さん、田畑さんもすでに亡くなられていて、確認は取れていません。ただその状況から当時、他社が大激怒したらしい。昼食時にテレビをつけた

らNHKニュースでアナウンサーが「坂井くんの不穏当な行動により、聖火ランナーを白紙に戻すことが発表されました」と言ってるじゃない。「内定取り消しだ」と自分も頭にきた。翻弄されてすっかり人間不信になって広島に帰った。もう誰に会うのもいやで、誰に何をぶつけたらいいのかも分からなかった。

——NHKニュースの全国放送でしょう。聖火ランナーへの注目の高さで混乱ぶりがうかがわれます。

坂井 広島に帰って、誰と口をきくのもおつくうで、題名も見ずに映画館に入りました。そしたら萬屋錦之介の「宮本武蔵」でした。「一乗寺の決斗」で宮本武蔵が吉岡一門を斬るわ、斬るわ、斬りまくった。痛快でスカッとなりました。映画が終わって場内が明るくなったと同時に、そこでもアナウンスが流れた。「坂井義則さん、坂井義則さん、至急自宅にお戻りください」（笑い）。

——宮本武蔵を見て良かったのですか？

坂井 そう。あれを見なかったらモヤモヤしたまま
で「聖火ランナーなんか、もうごめんです」と思っ
たままだった。自宅に帰ると日本陸連から電話で
「最終聖火ランナーの正式発表を行う」という連絡
が来ました。

孤独な足踏み

—— 64年10月10日、第18回五輪東京大会の開会式は、
前日までの雨がやみ、見事な秋晴れとなります。NHK
の北出清五郎アナウンサーが「世界中の秋晴れ
を東京に持ってきてしまったような秋日和でござい
ます」とテレビ中継を始めます。

坂井 僕は一週間前から青山の小掛さんの家にいま
した。当日は小掛さんが運転する車で信濃町の絵画
館近くの食堂・水明亭まで送ってもらい、そこで待
機していました。あのあたりに各国の選手団もみん
な集合していました。

その後、いよいよ北門前に移動して聖火を待ちま

した。僕の前の聖火ランナーは高校2年生の女子で、
その子がトーチを渡してくれたときに、ニコッと笑
いかけてくれたことをよく覚えています。少し開会
式の進行が遅れていたけど、僕はトーチを持ったま
ま足踏みをしていました。五輪旗を先頭に牛込伸之
小学校の鼓笛隊が退場して、次は僕が場内に登場す
る番でしたけど、そこで間を取りました。

—— 係員からの合図を待ったのですね。

坂井 いえ、僕ひとりだったんです。孤独でしたよ。
にぎやかな笛や太鼓の行進の後ですから、聖火には
静寂が似つかわしいでしょう。観衆に「次は何だろ
う」と思わせた方がいいと思ったので、僕自身がア
ドリブで「間」をつくりました。そのまま20秒ほど
足踏み続けました。それからトーチの腕が下がら
ないように気をつけて、トラックを3分の2周して、
163段の階段を駆け上がりました。

—— その様子をNHKの北出アナウンサーが名調子
で日本中に伝えました。「坂井君、登り始めました。

緑のじゅうたんを踏んで力強く登ってゆきます。未来に向かって限らない前進を象徴するかのよう、速く、高く、力強く登ってゆきます。オリンピックの理想を高らかに歌い上げて、聖火は秋空へ、秋空へ、登ってゆきます。ついに坂井君は聖火台に立ちます。日本の秋の大空を背景に、すくつと立った坂井義則君。燃えよオリンピックの聖なる火。フェアプレーの精神で競争。世界の若人。続いて坂井さんは右手で点火します。段取りで難しいところはどこでしたか？

坂井 点火では聖火台の裏に人がいて、ガスをひねるんですね。プロパンガスの栓を手動で開くんです。だからコックをひねってガスが噴き出すときの「シューッ」という音に耳を澄まして、点火しました。火がついたときに顔がとても熱かった。

人生は3分で変わった

——絶妙な間合いでした。今思うと会場には7万5

000人の大観衆がいたわけです。点火は少々、危険をとまなつたのではないですか。

坂井 そう。風向きでうまく点火できないときは爆発する可能性もないとは言えなかつたんじゃない（笑い）。

係りの人がリハーサルで「風向きを読んで点火しろ」と言うから、「そんなことはできない」と言いました。結果としてうまくいきました。周囲はともよく見えていたんですよ。ただ大歓声だったらしいけど、僕にはまったく聞こえていなかった。トラックを走っているときも、何も聞こえなかつた。

——不思議ですね。

坂井 うん、不思議。やっぱり緊張していたんだろうね。後日、市川崑監督の映画「東京オリンピック」を見た後、点火した後、僕は笑っていたんです。

本当にホッとしたんだと思います。あの頃は若かつたし、右も左も分からない田舎の若者だったから余計な心配もしなかつた。うまくやろうという邪念

3分で人生が変わった



©PHOTO KISHIMOTO

もまったくなかった。それが良かったんでしょう。リハーサルでは左手でトーチを持っていたんです。だから聖火台の右に立って点火していたのに、直前にインドでは左手は不浄な手だから、右手で持てという話になって、本番ではすべて逆にしました。あの3分間で人生が変わったんです。

——開会式の視聴率は84・7%。日本全国で6450万人が、坂井さんを見つめていたと言われてます。その映像は通信衛星シンコム3号から海外にも配信され、宇宙中継とも言われました。大役を果たした後、五輪開催中はどうしていたのですか。

坂井 毎日陸上競技を見ていました。100メートルの金メダリスト、ボブ・ヘイズ、200メートルの覇者ヘンリー・カー（ともに米国）らの走りに圧倒されていました。

——大会期間中、あちこちで「見事な聖火最終ランナーだった」とほめられたでしょう。

坂井 「『苦勞さん』とは言ってもらったけど、「見

事だった」なんて言われてないですね。大会の2週間はまだ激動で、日本中が五輪に精いっぱいだったからね。振り返る余裕は誰にもなかったんだと思います。ただ僕は聖火つて何かを考えました。1936年のベルリン五輪でヒトラーが国威発揚を考えて聖火ランナーが登場したと言われてるけど、日本は平和の火をともしという感じでアレンジしたんでしょう。だから昭和20年8月6日の原爆投下の日に広島に生まれた僕が、分かりやすかったんでしょうね。自分が最終聖火ランナーをやりたいと言ったことはただの一度もなかったわけです。ほかの人が決めてくれたことに乗った3分間でしたが、それで僕の人生は間違いなく変わった。ありがたい3分間です。選んでくれた方には今も心から感謝していますし、人生最大の思い出ですね。

——東京五輪から49年もたつのに、今も「あの五輪の坂井君」と言われ続けています。苦しいと思ったこともありましたが？

坂井 他人に言ったことはないですけど、そりゃあいろいろありました。選手として五輪に出場したくて次のメキシコ五輪を目指しました。

東京五輪の2年後、66年のバンコクで開催されたアジア大会で400メートルの日本記録も出しました。調子良くてね。メキシコは選手として出場するんだと気持ちも高ぶっていました。そうしたらアキレス腱を痛めたんです。ものすごくがつくりしました。ところが、マスコミは面白がつて、僕がうつむいている写真を雑誌に掲載しました。隣にいた何の縁もない女の子とのツーショット写真も載せて、「記録低迷の原因」みたいな書き方もされました。

田舎に帰ったときにおふくろが「聖火ランナーなんか本当にやらなきゃよかったね」と言ったこともあった。親も身に染みて感じたことがあったんだと思います。聖火ランナーをやって辛かったことは、ずっと口をつぐんできました。

報道マンの心意気

—— たくさんの就職先が舞い込んだ中から、フジテレビを選ばれました。

坂井 大学1年のときはマスコミの馬鹿野郎って心底怒っていたのに、時間がたつにつれて、逆に一匹狼でやれる男の仕事じゃないかと思えてきて、マスコミに行きたいと思うようになってね（笑い）。

—— フジテレビ入社はメキシコ五輪出場を諦めた68年、スポーツ局への配属でした。72年のミュンヘン五輪ではパレスチナ・ゲリラが選手村でイスラエル選手団を襲撃した忘れがたい事件が起きました。あのときはどうしていましたか？

坂井 現地にいましたよ。連日五輪の報道をやっていたんです。いよいよ大会が後半に入る9月5日、日本からの連絡で「アラブ・ゲリラがイスラエル選手団の宿舎を襲撃して死者が出た模様……」との一報が入った。深夜でした。前半戦が終わったという

安堵感で一杯やっていたときだった。ものすごく驚いた。「五輪は平和の祭典なのに、何でそんな事件が起きるんだ!」と憤りを感じて、とにかく選手村の中に入って、この目で確かめようとしたけど、厳重な報道管制が敷かれていてネズミ一匹入れない。そこで早大の後輩の水球部の選手のユニホームを借りて、選手に化けて選手村の中の様子を見に行くことを思いついた。そして日本選手団のユニホーム姿で堂々と中に入った。タイムラグがあつて、まだ選手たちには何も知らされていないときで、各国の選手たちはふつうの生活をしていた。卓球をしていたり、談笑していたり。だからむしろイスラエルの選手たちも競技のことだけを考えている平和な時間の中にゲリラが入ったのだと分かつて、その卑劣さを感じるという言葉がなかった。だからそのとき自分が感じたものだけを日本に向けて電話でリポートしたんだね。

——勇敢でした。選手に化けて報道した人は世界で

ただ1人だったのではないですか？

坂井 他の国の人のことは知らないけど、怖いもの知らず……だったね。若かつたんですよ。

——さて現在、東京は2020年の五輪招致に立候補しています。どんなお考えを持っていますか。

坂井 なぜ今、東京なのか？ どんな意味があるのか？ という人もいますけど、もう理屈抜きですよ、五輪は。頭でつべこべ考えて、あーでもない、こーでもないじゃなくて、じわつと沸いてくるものが五輪にはあるでしょう。あれですよ。小学生たちにも後できつとプラスになる。教室で教えられるものがある。東京で五輪をやることで、日本中の老若男女が受け止めるものは、とてつもなく大きいはずですよ。理屈じゃなくて、東京でやりたいですよ。

(坂井義則氏は、2020年東京大会を心から楽しみにしていたが、この取材から約1年後の2014年9月10日・脳内出血で亡くなった。享年69)
スポーツゴジラ 22号より再録しました。

///1964年から→未来へ///

古代オリンピックの 理想は今も 「聖火」に宿る

笠原 一也 構成 阿部雄輔

都市国家同士が争いを繰り返していた古代ギリシャの若者たちが4年に一度干戈^{かんこ}を収めてスポーツに興じたオリンピアの地で行われる聖火の「採火式」は、古代オリンピックの理想を現代につなぐ象徴的儀式だ。長野五輪の採火式に立ち会った筆者が自らの見聞を語る。

↓採火式の様子

→カラブリタ聖火と笠原氏



笠原 一也（かさはら・かずや）1938（昭3）年、埼玉県生まれ。和歌山県保健体育課長、文部省競技スポーツ課長、1998（平10）年長野五輪時はJOC事務局長、東京女子体育大学教授、国立スポーツ科学センター長、2008年（平20）にはナショナルトレーニングセンター初代施設長など歴任し、その後、日本オリンピック・アカデミー会長をはじめ数多くのスポーツ団体役員を務める。

オリンピックは夏季大会も冬季大会も、総合開会式から始まると思っている人が多いと思います。開会式のメインイベントは聖火台への点火ですが、この聖火はギリシャのオリンピックという町からはるばる運ばれてきたもので、オリンピックはオリンピックで行われる「聖火採火式」に始まるのです。

市川崑監督の映画「東京オリンピック」でその採火式の映像が見られますが、現地の式典は非公開で実際に立ち会った日本人は数少ない。私は長野冬季オリンピックの採火式にN A O C（長野オリンピック組織委員会）東京事務所長として、またJ O C（日本オリンピック委員会）事務局長として参加しましたので、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを前にその時の経験をお伝えしておきたいと考えました。

オリンピックはアテネから車で約6時間、ペロポネソス半島西部にある人口1400人ほどの小さな町です。紀元前8世紀から1100年以上にわたって

4年に一度、ここで古代オリンピックが開催されてきました。都市国家同士戦争を繰り返していた古代ギリシャの国々は、オリンピック開催中とその前後数カ月はどんなに激しい交戦状態にあつても休戦してオリンピックに集ったのです。

古代オリンピックの開催地で すべて女性により厳かに行われた「採火式」

時代は下って1881年、ドイツの考古学者エルンスト・カルチウスによって古代オリンピックの遺跡が完全に発掘されます。古代オリンピックの姿も明らかに becoming いき、これに刺激を受けたフランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵が古代オリンピックの理想復活を掲げて奔走し、1896年の第1回近代オリンピックアテネ大会開催にこぎつけたのです。

オリンピック開催期間中にシンボルとなる火を燃やし続けるアイディアは1928年アムステルダム

大会で初めて採用されました。オリンピックで採火した火をリレー方式で開催地まで運ぶことが正式な行事となったのは36年のベルリン大会からです。古代オリンピックの遺跡は現在「国際オリンピックアカデミー（IOA）」の敷地内にあり、その中でも最も古い紀元前7世紀の遺跡、最高神ゼウスの妃ヘラを祀った「ヘラ神殿」で、凹面鏡に太陽光を集めて採られた火を「聖火」とするとされています。

長野の採火式はオリンピック開催の3カ月前、1997年12月19日に行われました。この日は朝から小雨模様で太陽光からの採火ができず、4日前に採火した予備火が使用されました。式典に立ち会った日本人は塚田佐長野市長、小林実NAOC事務総長、城内康光駐ギリシャ日本大使ら私を含めて10名弱でした。

正午。トントントンと静かに太鼓の音が鳴り始めます。ヘラ神殿はアテネのパルテノン神殿と同じドリア式建築ですが、現在の姿は数本の石柱を残す

のみ。その柱の陰から古代ギリシャの巫女に扮した女優さんが十数人あらわれ、中央の巫女が掲げる炉からトーチに聖火が点されました。

その巫女たちの中に一人だけ小学校高学年ぐらいの少女がいました。本来は処女の巫女が行う儀式だったのが、実情に合わなくなったので女優さんと少女を起用するようになったそうです。式は太鼓の音だけで終始無言で進行し、太鼓を叩いていたおばあさん巫女を含めすべて女性により執り行われたのです。私のようなオリンピックを研究してきた人間にとっては深い感動、感激を誘われる荘厳なセレモニーでした。

**創始者クーベルタンの心臓が眠る地で
にぎやかに行われた「聖火リレー出発式」**

続いて同じくIOA内の「クーベルタンの森」での「聖火リレー出発式」に移ります。クーベルタンの墓はスイスのジュネーブにあるんですが、彼の遺



献花やランビス・ニコラウHOC（ギリシャオリンピック委員会）会長のスピーチ、ギリシャ正教の聖職者らしき人物がお祈りを捧げたり、鳩を飛ばしたり、ギリシャ国歌、君が代、オリンピック賛歌を歌

言で心臓だけがオリンピアに埋められていて、記念塔が建っています。

長野から駆けつけた

「NAOC採火団」の

メンバーも

参加して、

クーベルタ

ンの塔への

ったり、にぎやかなイベントでした。森の中から現れた巫女によって運ばれた聖火は小さな聖火台に点され、その火を長野オリンピックのトーチに移し、長野オリンピック聖火リレーの公式ユニフォームを着たギリシャ人の青年がそれを持ちゆつくり走り出したところでは発式は終了。採火式と出発式でほぼ2時間でした。

第2次大戦下の悲劇の町やスキー場での歓迎セレモニーの後、聖火はアテネへ

聖火はその日のうちにペロポネソス半島北部のカラブリタという、人口20000人の小さな町に車で移動します。第2次世界大戦中の1943年12月、ドイツ軍占領下のレジスタンス活動への報復として15歳から60歳までの10000人を超える男性が虐殺された悲話が残るところです。でも平和の火である聖火を町の人々が総出で歓迎してくれて、夜には繁華街に繰り出し、輪になって踊ってくれたのでした。



その雰囲気思わず塚田市長や小林事務総長、私も踊りの輪に加わりました。聖火は町の中心部の聖火台で一晩中燃え続けていました。

翌朝、聖火は海拔800mのカラブリタからさらに山を登ってヘルモスというスキー場に移動しました。午前11時半から12時半まで、聖火リレーの引き継ぎセレモニーが寒い雪山の中で厳かに行われ、長野

からは和太鼓や神楽踊りが披露されたのです。

その後聖火は車でアテネに運ばれます。12月19日にオリンピックで採火された聖火はN A O Cに正式に引き渡される「聖火引渡式」まではH O Cの管理下にあります。引渡式は12月22日に予定されているので、それまでの間アテネのパナシナイコスタジウムの聖火台で燃やされ続けます。

アテネの競技場から空港へ。 N A O Cへの「引渡式」を経て聖火は日本へ

パナシナイコスタジウムは紀元前4世紀に創建された競技場で、1895年に復元改修されて翌年ここで第1回近代オリンピックアテネ大会が行われました。2004年アテネオリンピックでも男女マラソンのゴール会場として使用され、野口みずき選手がここで金メダルのテープを切っています。

12月22日、アテネには古橋廣之進J O C会長も合流し、一同でまず聖火が燃えるパナシナイコスタジ

アムを訪問し、その後聖火引渡式が行われるエリニコン空港に向かいました。空港ではギリシャ国歌、君が代が吹奏され、ニコラウHOC会長から塚田市長に聖火が点つたランプが手渡され、古橋会長が謝辞を述べました。聖火と一行を運ぶためにJALのチャーター便が待機していましたが、火の点いたランプをそのまま機内に持ち込むことができないため、聖火を大型のカイロに移して日本に向かうことになりました。

成田空港到着は12月23日。空港で記者会見をして総理官邸に向かいました。当時は橋本龍太郎総理です。総理や町村信孝文部大臣に採火式の報告を申し上げ、聖火をご覧いただきました。

聖火は都内で年を越し、1月4日、「分火式」が行われ、国内3カ所に向かったのです。今では分火が認められなくなっており、2020年東京大会の国内聖火リレーのルートは1ルートですが、長野の時は1月6日、沖縄県から九州西部、本州日本海側

を通るルート、鹿児島県から九州東部、四国、本州太平洋側を通るルート、北海道から東北、関東を通るルートの3ルートに分かれてスタートし、開会式の前日2月6日に長野市に到着し、一つの火になったのでした。

「採火式」で実感した、オリンピックが オンリーワンのスポーツイベントである理由

長野の採火式を体験した人間として強く感じたのは、オリンピックにとつては今でも古代オリンピックとの連続性やクーベルタン男爵の理想が大事なんだということです。平和への願いやオリンピック休戦のことを忘れてしまつては他のスポーツイベントと何も変わらなくなつてしまう。2020年東京大会の採火式は来年3月12日に古式に則つて行われます。「スポーツゴジラ」の読者の皆さんにはオリンピックがオリンピックでの採火に始まることの意味をあらためて考えていただきたいと思います。

夢劇場『馬』

No.16



羽のある馬

今年4月、平成の最強牝馬と言われたウオッカが亡くなった。

2007年の日本ダービーで唯一の牝馬として出走し、観客の目を一身に背負い、4コーナーを回って馬場の真ん中を突き抜けた。ラスト600メートルは33秒0。文句の付けようのない女王様レースだった。

ダービーを制した牝馬は、長い競馬史の中でわずか3頭しかない。

1937年のヒサトモ、1943年のクリフジ、そして2007年のウオッカである。

ちなみにクリフジからウオッカまで実に64年もの時間がかかっている。これはなぜなのか？やはり牝馬は牝馬らしく、桜花賞↓オークスが妥当だとされてきたからなのか……。

人間の想像力などを一蹴するかのように、クリ

フジは爆走した。デビュー戦の1800メートルこそ着差は1馬身だったが、その後は3馬身差、5馬身差、6馬身差……圧倒的な大差で他馬を寄せ付けなかった。

1943年の日本ダービーは今も伝説だ。

当時は一頭ずつゲートに入るスタートではなく、網をバネではね上げるバリアー式だった。多頭数のダービーでクリフジは周囲の馬に挟まれて、スタート時に一回転してしまった。

大きく出遅れたが、最後方からゆるりゆるりと24頭を抜き去り、最後は2着のキングゼヤに6馬身差をつけてレコード勝ちした。

そして当時、秋に行われていたオークスでは着差10馬身。さらに3000メートルの菊花賞も大差で勝利。生涯成績11戦11勝。人は彼女の背には羽が生えているのではないか……？と我が目を疑ったという。

令和の時代のクラシックロードにはどんな女傑が登場するのか。期待している。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011

埼玉県新座市野火止8-16-32

株式会社東美物流

『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのためやむをえず変更しました。

10冊まで 送料 300円

20冊まで 送料 600円

40冊まで 送料1000円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の秋号44号は2019年10月初

旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読みにられます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫

●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本体育・スポーツ政策学会会長）／笹原一（二（びあ）株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送会長）／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（伏見工業高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部 太田章研究室 気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®

2019年6月5日発行

第1巻第43号

無断転載を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

平塚貴大・山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 図書印刷株式会社

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401